

『浮雲』の破綻

上村敦之

まえがき―主として、一九五四年十月の「文学」所載の清水茂氏の所論への検討を中心に論述した。氏の「『浮雲』論」は、副題を「二律背反の出發」とするが、これは論中に頻出する「リゴリズムとスノビズム」を指し、邦訳すれば、「嚴格主義と俗物根性」になろうか。私の論点はこれにスポットを当てることになる。

一

一八八九（明治二二）年七月「浮雲」第三編の執筆が中絶されたとき、絶対主義の基礎はまったく固められていた。

ところで「浮雲」第一編が起稿された一八八六（明治十九）年の夏―秋は、欧化熱にいろどられた各種「改良運動」もまたさかんであった。こうして「浮雲」各編は、民権運動敗退後の八六年から、憲法発布祝賀の行列がにぎわう八九年へかけての、その間、欧化熱から国粋主義への展開を含んだ、あしかけ四年の「時」をはらんで書き継がれている。

「…その点、『浮雲』には一貫した思想という程のものはありません。」^(註一) という二葉亭のことば、「『浮雲』は二葉亭の思想動揺の過程に訪がって作られているから、第一編と第二編と第三編と、各々孤立していて一貫する脈絡を欠いている。が、各々独立した個々の作としても云々」という魯庵のことばは、「浮雲」の考察に当たって前提的に考慮しなくてはならないことだ。

二

「浮雲」第一編（一八八七・六月金港堂刊）は、一八八六（明治十九）年、十月二十八日、文三が免職になって園田家へ帰るところを導入部とし、文三・お勢の生い立ち・閨歴および同年夏の月下の差向い前後の「風変わりな恋の初逢入」へ廻り、一転して翌二九日の文三の免職告白・お政の態度一変・お勢お政の「衝突」となり、幾日かたってからの昇の來訪、そしてそこでの「明後日」の団子坂の菊見の約束に終わる。文三はなぜ免職になったのか。これを二葉亭は、お政の前で文三に「ひ、人減らしで…」

(第五回)とほとんど罪悪感に似た気弱さで告白させるだけで、

「免職・非職」が当代の流行語であったほど、かなり広汎な社会不安を呼び起こした事実を、国家権力の機構・政策とのかかわりにおいて客観的に追求していない。ロシア小説に学んで「官尊民卑」ということが嫌いであった」にせよ、社会現象を「文学上から觀察し、解剖し、予見したりする」趣味や思想を抱いていたにせよ、それが当代日本の現実の上に具体的に伸び伸びと適用されて「いない」。「社会主義(ソシアリズム)」が、まだ熱さない素朴でルーズな觀念の域を脱していなかったことがここに表れている。

しかし、その限りで、「曾て西欧の水を飲まれた」課長のことを「自由主義の圧制家」だという(第六回)鋭い把握をきらりと視かせている。冒頭第一回の退庁時の官員を上・中・下三等に分けての「髭づくし」の戯文にしても、殆ど非合法すれすれの抵抗のモメントを含んでいる。その意味で、第一編における戯作的残滓の問題を、マイナスの側面からのみ取り上げることには賛成出来ぬ。庶民的な発想をゴンチャロフやドストエフスキイの文体の風刺性・分析性に媒介された「国民語の文学」にまでたかめようとする積極的な志向が反映されたものだ。

第二編における二葉亭の人間典型創造への意欲は、かなりはげしいものだった。しかし、理論的把握が十分でなかった。このことについては、稲垣達郎・蔵原悦人の分析があるが、魏叔子の「理気」への共鳴などへつながる官学の素養によって鍛え上げら

れた思考の倫理的リゴリズムに通う非合理主義的モメントと、ベリンスキの理論の思弁的モメントとの結びつきが、「小説総論」の個々の人間具体と「人の意(イデー)」との関係を觀念的な「東洋流の機械的対立」に傾けて把握させ、小説論の中での形象化・造形化の問題として展開することが不十分だった。この意欲と方法的未熟の隙を、ロシア小説の典型に学びながら、結局、氣質物や滑稽本式人間類型化の技術や「才子佳人」意識の残滓やらが塗りこめていくこととなった。かくて二葉亭は、当代の新世代である文三・お勢を新しい觀念によって装いつつ、結局それにあざわしい肉体を与えることが出来ず、文三には封建的な家父長主義者の、お勢には自ら意識し得ない新風俗の戯面の、いずれも見栄えのしない類型の実質を与えるに止まった。第六回で園田家に現われる昇にスポットを当て、文三と全くうらはらの、奇怪な程觀念のかげりに煩わされない徹底した俗物に仕立てお勢に心理的動揺を与えた時に、觀念と肉体、真理と感情のルーズな類型的縫い合わせが破綻して、リゴリズムとスノビズムの二律背反的自己分裂が用意された。反官僚意識や「日本文明の一原素ともなるべき新主義と時代遅れの旧主義と衝突をする」という楽天的な主題が投げ捨てられ、二律背反の深さに筆者が戦慄するのは第二編以後なのだ。

一八八七(明治二十)年八月の蘇峰に宛てた書簡には、「浮雲」第一編出版直後の積極的な人間典型創造の挫折に伴う内面の苦悩が

痙攣的に昂ぶった筆致で書かれている。

「技量とは何ぞ小説の技量に候や、若し果たして然らば何を標準として御判断なされ候や、万一「浮雲」なれば小生また何をか言はん、唯肩をすくめて手を啓く有らんのみ、小生は所謂技量を求めて之を得ず、遂に失望遂に墮落したる者に御座候」とあるあたり、文三やお勢が抱いている新しい観念に心理的肉体を与えることが出来ず、古い、幼稚な発想と技術で塗りこめ滑稽な戯画としてしまったことへの嘆声が響いている。

三

「浮雲」第二編は、第一編末尾第六回での「明後日」をうけた「十一月二日」の午前の園田一家観菊文度の場に始まり、同日の団子坂、文三の石田訪問、お勢が寝る時、文三を「何故アア不活発だろう」と考えることなどあり、三日を経て四日の文三と昇との言い争い、五日昼ごろの文三とお勢、お勢とお政との食い違った心理からする言い合いに及ぶ、四日間の出来事として構成されている。

冒頭第七回の団子坂の景況を叙したくだりの中に、自由民権家を風して「人の横面を打ち曲げるが主義で、身を忘れ家を忘れて拘留の辱に逢いそうな毛鷲暴出の政治家も出た。」とシニカルな一行が挿入されている。又、それに繼いで、婦人矯風会、官員像、その日暮らしの貧民等の様相がスケッチされている。

しかし、これらの「社会事象」が、一様な戯文調の風俗類型化の操作でひとからげにされ、「おもへば浮き世はいろいろさまざま」とあつさり片付けられてしまい、関心の赴く所やがて園田家の二階に残された文三の心理ばかりとなつてゆく。そこに「欧化・改良」熱もようやく停滞し始め、民権家はモップ扱いにされることで自らもそれに近付き、やがて保安条令（十二月）によって弾圧の総仕上げの憂き目に合う——一八八七年後半の発展のめどを失つた社会に投げられた二葉亭の不信、ネガティブな主体の固執の姿がある。

以下、十一回目までは、課長の不条理の追求——お政への上司非妥協の闡明——老母・お勢のため、良心にもとり上司に陳弁するが——唯、是非利害を捨て昇に屈従するは死すとも不可……この剣出しにされた非条理よりは、もはや封建的リゴリズム以外の何物でもない。お勢にしても同様で数日前の「女丈夫」は、「十一月五日」には前夜お政に言い含められた通り、昇に依頼して課長に復讐運動をすることを勧め、かつ昇が破廉恥でも卑屈でもないこと、ただ文三の温順に対して昇が活発な点を説く始末だ。文三のしやにむにの道学的リゴリズムが、すでに「真理・条理」の主題の喪失とその観念性の封建的なものへの歪曲である限りにおいて、お勢はますます観念に見離された、少々派手好みのありきたりの「娘氣質」に還元せざるを得ず、昇流の「同権論」は信じなくても、その活発なスノビズムの側に必然的に追いやられていく。いわば、

二葉亭は「心理」の獲得を代償に身を国粹的なものへの傾斜に委ねたのだ。そこでは、文三もお勢も、ラスコーリニコフやペーラとは似ても似つかぬ、昇のような俗物にかきまわされて自己喪失におちいついていく脆弱な個性でしかあり得ないが、しかしその限りで辛くも、人間的主題をさがしあぐねて混沌に陥った明治二十年代初頭の「日本文明の裏面を描き出す」ことにはなっている。

四

「浮雲」第三編は、「あひびき・めぐりあひ」の訳載に続く八年末から八九年一月へかけて起稿されたとしていい。二葉亭は、第三編の冒頭では、はしがき風に「此小説はつまらぬ事を種に作つたものゆえ、人物も事物も皆つまらぬもののみでせうが」「つまらぬ事にはつまらぬという面白みがある」と書き、又、十三回の初めにも「心理の上から観れば、それは解らう。」と書いて、はっきりと現実の日常性の上にたつ心理的手法への傾倒の決意を述べて、そういうロマンティックな志向と決別しようとする態度を示している。しかし、これらの言葉に、どことなく居直りじみた負け惜しみ、自他への後ろめたげな弁明の響きを感じざるを得ない。

文三・昇・お勢のような、それぞれ自己の生きる主題を喪失した脆弱な個性の二律背反的關係を、心理の綾ただそれだけの場で追求していくことが、どこへ導かれるか。それは結局、葛藤・心

理そのものの喪失、つまり心境への作家主体のつけこみ以外にないのだ。

二葉亭はこれを目安として書き進めたのであろうが、そのデテイルにおける心理的なモメントの追求の深化と共に、ある後ろめたさを感じながらもこのプロット・覚え書きを無視していかなければならなくなった。魯庵のいう「恐らくはマダ発表するを欲しない未定稿」ということを考慮に入れた上でも、第十六回あたりから日時の明確な設定が失われている。

第三編における、二葉亭の二律背反的自己分裂は、更に深いものだ。「お勢に窘められて、憤然として部屋へ駆け戻った」(十三回)文三が、一旦離宿を思い立ちながら、孫兵衛のことを思い出すことで忽ちそれを思い止まる。この家長の想起は以後の文三の家父長主義的な意識・行動の方向を支えていく象徴的な設定だ。このような、もはや封建的な因循ともいえる文三を、筆者は初めのうちこそ軽い皮肉つばい筆致で描いているが、十六回廻りから殆ど一緒になってその肩を持ち始める。筆者が文三の肩を持てば持つほど、文三の極北の昇・お勢の人間關係を、「淫猥」そのものとして描くことを余儀なくされる。折角、ツルゲーネフやゴンチャロフから精細な恋愛心理の描写の技術を学びながら、いざ昇とお勢の交渉を描こうとすれば、結局、洒落本と同一異曲の感性的退廃の発想においてしかそれを表出出来ない自己分裂に陥る。

「浮雲」の中絶を余儀なくした作家たることへの一方は「一枝の

筆を執りて国民の氣質風俗志向を写し」云々（「二篇目」参照）という観念的倫理的把握と、他方では、「粋とか通とかいひて此世を遊び暮らせし人々の食おうがため、呼吸をしうがために書き散らしたる」書物にかかわる（前掲）とする感性的退廃の傾向での把握との自己分裂がとりもなおさずこの自己分裂であつた。

たしかに二葉亭は第三編で、人間性のひとかけらもない俗物プロパーの昇の側へお勢をそのリゴリズムで追いつていくことで、当時既に透谷などに例外的に芽生えていた市民的自我の初々しい営みを、エゴイズムといつしよくたにして共にひねりつぶそうと力んではいる。しかしまた、力めば力むほど文三を滑稽でみじめな鎚で身を固めさせていったのも事実であり、そこに二葉亭の意図を越えた形象のアイロニカルな風刺性のただよいが感じられるのは否定しがたい。作者はしきりに文三に共感を誘おうとするが、今日、昇の軽薄さからと共に文三の古風さからも風刺的な教訓を汲み取らないものは稀であらう。

つまり、このスノビズムとリゴリズムの二律背反は、その中に実行と芸術の背反の問題をもはらんで、筆者の生涯と作品を貫く主題とさえもいえる。

五

ここで、「浮雲」全体の見取り図を整理してみる。
まず、その制作意図として二葉亭は「ペリンスキの批評文な

どを愛読していた時代だから、日本文明の裏面を描きだしてやろうというような意気込み」であつたといっているが、彼はその文明批評を、心情は高潔だが生活力も決断力も乏しい理想家の内海文三と下劣な出世主義者で世渡りのうまい本田昇との対比によって行なっている。文三と昇とはもともとある役所の同僚だが、文三が「事務外の事務」を怠つたために失職したので、彼が下宿し、昇も出入りする文三の親戚園田の一家に微妙な波紋が生じる。一人娘のお勢は文三の幼なじみで許嫁同様の関係だが、生活力を失つた文三の僻みと煮え切らぬ態度のため次第に快活でお世辞のよい昇にひかれてゆく。やがて、お勢は文三とは同居しながら口もきかぬようになり、昇に身をまかせてしまう。文三も途中でお勢に対する恋からやや醒め、親戚としての情誼から彼女を危機から救おうとするが効がなく、自分の無力に絶望、狂気してしまう。文三は彼自身が自分の「性格の一部を發展させた」と言っている通り筆者に最も近い人物であり、或る意味で彼自身の戯画であり、又、同時に理想の人物であつたと思われる。彼が当時抱いていた思想が純粹に現われた形であつた。「多数であつて、而も現時の日本に立つて成功もし、勢もあるのは、昇一流の人物だろうと考えた。」と筆者はいふ。「浮雲」が作者にとって自嘲の形式になつたのはこのためである。

二葉亭が明治の知識人に対して行なつた最も本質的な批判がここに現れるが、この半ば喜劇の形を取つた「浮雲」においても、

インテリの現実への盲目、それと表裏する無節操な順応型の人物の成功、一口に言えば生活の秩序と倫理の秩序との乖離という明治人の内面生活の遭遇した最大の問題をはっきり提出している。

しかし、こういう二葉亭の独創は当時にあつては殆ど理解されず、ただその表現形式の新しさと描写の緻密さがわずかに人々の注目を惹いた。^(注十七)

要するに、二葉亭は近代小説の骨髄を正しく我が国に移植した点で、小説史上記憶されるべき業績を「浮雲」一作によつて残したのだが、まさにそのために彼は明治文学の中で例外的存在として孤立を強いられたので、自己の先見の犠牲になった点で珍しい悲劇の主人公であつたといえる。

六

次に、作品の破綻と同時代作家とのかかわりを掘り下げてみる。二葉亭が、「浮雲」をうまく書けなかつたのは、結局、世評に氣を腐らせたということだ。^(注十八) 色々な理屈はいうけれども、結局、氣を腐らせたという点に尽きる。道遥には、自分の家を売つても新しい芝居をやるというところがある。四迷にはそれがない。「小説総論」も「小説神髓」がなければ書けなかつた。前者から一歩進めたものであつても、それだから発展しなかつた。自分であれだけのものを独立に書く氣があれば、二葉亭の文学はもっと積極性を持っていたはずだ。

文三は、大体「浮雲」の主人公は、二葉亭に似た人間で、筆者は同情をもつて書いている。^(注十九) 文三自身も、二葉亭が書いた意図も、文三自身の意識でも、新しい人として描かれている。が実際は、文三を支えているのは封建時代の倫理で、新しい時代から文三を支える倫理は何も出てこない。自分の生き方に段々自信を失つていく。新しい時代の現実が、自分の倫理と食い違つてくる。その経過に「浮雲」の本当のテーマがあると思う。そういうことをあの時代に感じたということが、二葉亭の才能だつたと思う。^(注二十)

要するに、あの時代に初めて出てきた知識階級の生き難さが出ている。それはあとの漱石にも鷗外にもかかわつてくる、大きなテーマである。

七

終わりのパートとして、「浮雲」の破綻・失意・その後の転身に触れ小論を結ぶ。

初めに「浮雲」の構想の一端に触れる。「浮雲」のモデルや事実は無かつたと思う。その頃の作者は自分の体験をありのままに書き、周囲の人物をモデルとするようなことは余り書かなかつたからである。

筆者の家のすぐ近所にA・Nというその頃若い書生間に評判な新しい女が住んでいたが、強いていえばこの女が「浮雲」のお勢のモデルであつたそうだ。Nはこういう社交団体のどこへでも顔

を出してとび廻っていたから、御面相は頗る振るわなかったが若い男には顔が完れていた。その上にこの女は弟と二人ぎりの気随氣儘な暮らして、遠慮気兼ねをする者が一人も居なかったから、若い男はよい遊び場にしてしつかりなしに出入りして、毎晩十二時一時までキャッキョと騒いでいた。

「構成」に触れていくが、「浮雲」は、筆者の思想動搖の過程に跨がって作られているから、一・二・三各編がそれぞれ独立して一貫した脈絡を欠いている。その評価は、一編は未熟、三編は脂が抜けて少しタルミがあるが、二編は全部が緊張していて、一語一語が生きて生動している。未完成品とはいえ、明治文学史上絢爛たる画時代的名著だ。

その頃の二葉亭は生活上の必要と文藝的興味の旺盛と周囲の圧迫に対する反抗によって文学を一生の生命とする熱火の如き意気込みがあった。が彼の文学は、人生に基礎を置く文学で、単なる芸術一点張りの享楽主義や遊蕩三昧や人情趣味の文学ではなかった。ペリンスキー・ゴンチャロフ・ドストエフスキー・ツルゲーネフの文学であって、京伝・春水・三馬の文学ではなかった。然るに当時の文壇は：

例えば「浮雲」に対する世評も、口を揃えて称賛したが、彼の称賛は見当違い・枝葉末梢で、凡近卑小の材を捉えて人生の機微を描こうとした作者の觀照的態度に対して批判を加えた者は一人もなかった。尤もこの二葉亭の目的は失敗していたが、その失

敗を認めて考察の足りないのを痛切に感じたのは作者自身で、世間一般の讀者・批評家は作者が脂汗を流した人生の觀照には全く無関心・没交渉であつた。いかに感嘆され称賛されても、藐睨みの感嘆や色盲的な称賛では甘受することが出来ないで、まず出発点からして不満足を感じざるを得なかった。且つ又、二葉亭にとっては、文学それ自身よりも根本の人生問題の方が重大であつた。人生のための文学などとは片腹痛い心地がして堪えられなかった。然るに又一方には物質上の逼迫がヒシヒシと日と共に加わってきた。

かくて、文壇的野心の奮勃としていた当初はともかく、自分の文学的才能を危ぶみ出してからは唯一の生活手段に充てた文学に全く絶望して、父の淫面、母の愚痴、人生問題の紛糾疑惑、心中にまだ宿す政治的野心の余燼などの不平・未練・慚愧・悔恨・疑惑が四方八方から押し寄せてきて、恰も稲麻竹葉と包囲された中に籠城するように抜き差しならない煩悶苦吟に苛まれていた。

「嗚呼我が氣力は衰えたるかな、学校を出でしより以來一日として心の晴るることなければ楽しとも思いたることもなし、今の我が身の上をひしひしと思いつむる時、生きてかかる憂き目を見んより死してこの苦を免がる方はるかに勝るべしなど思いたるは幾度もありたれど、その頃はまだ氣力衰えたと壊滅するには到らざりしをもて筆を執りて文を草することも出来しなり、されどこの頃は筆を執るも懶くてただ思いくづをれてのみくらす、

誠にはかなきことにこそあれ。」次に、失意の中絶と軀身に進む。

「浮雲」第三編は、作者の日記の端に書き留めた腹案によると、お勢の墮落と文三の絶望とに終わるのだが、発表されたものを見ると、腹案の半ばにも達しないで中途から尻切れとんぼに打ち切られておる。最終原稿も、自分でも満足しない未完成の原稿をイヤイヤながら引き渡したに違いないのは明瞭に判断される。最終日記にも「今までは某某らの作る小説は拙くして読むに耐えずと思いつるが、余の作に比ぶれば彼らの作は遙かに勝れり、余は元来小説家にもあらず、又、小説家とならんとも思わず。」云々とあるように第三編以前から文学に絶望して衣食の道を他に求めるべく考えていたのがこの不快な絶望に益々沮喪して断然文学を思い切るべく決心した。この決心は第三編の執筆中から萌していた。飽くまでも自分の天分を否定し、文学ではとても生活する能力は無いものと諦め、なまなか天分の乏しいのを知りつつ文学三昧に沈湎するは文学を冒瀆する罪悪であると思ひ詰め、何とかして他生活の道を求めて学問才芸を潰しに投げ売りしても一家の経済を背負って立とうと覚悟した。が、覚悟はしても、一面には極めて狷介で人に下るを好まず一面には人に對して頗る臆病で、伝を求めて権門貴戚に伺候するはおろか、先輩朋友の間すらも奔走して頼んで廻るような小利口な真似は生れ付き出来得なかった。どうにかしなければならぬと思いつつもどうにもすることが出来ないで独り煩悶沈思していた。

この苦況を見るに見兼ねて、若し仕官する希望でもあるならばと片肌脱いでくれたのが語学校の旧師の古川常一郎であった。

二葉亭四迷が（古川部下の翻訳官として）官報局に出仕したのが明治二十二年の夏であった。

― 解題 ―（注一）「作家苦心談」、（二）魯庵「二葉亭四迷の一生」、

（三）「作家苦心談」、（四）「余が半生の懺悔」、（五）「余が言文一致の由來」、（六）稲垣「文学革命期と二葉亭四迷」、（七）藏原「プロレタリア文学理論の評価について」、（八）「文学」二十二の三参照、（八）

「落葉のはきよせ・二龍目」参照、（九）藏原氏の所論、（十）蘇峰宛ての、明治二十年八月二十五日書簡、（十一）一八八八・二月、金港堂刊、（十二）「余が半生の懺悔」、（十三）第十三回一八八九・七月七日刊「都の花」四卷十八号、第十六・十七回七月二十一日刊同四卷十九号、第十八回八月刊同五卷二十号、第十九回八月十八日刊同五卷二十一号。（注十四）

※この「目安」とは、明治二十二年「女学雑誌」掲載の「ゴシップ風記事」や「くち葉集ひとかごめ」や「落葉のはきよせ二龍め」更に「作家苦心談」などを指す。（十五）「二葉亭四迷の一生」（十六）三編十七回参照、（十七）「浮雲」の文体は言文一致体の口語文であり、これにより彼は、山田美妙と並び口語体小説の創始者とされる。（十八）これは藤村が誰かに言ったという。確証はないが伝説としても面白い。（十九）これが、「其の面影」の哲也になると、唯者と彼の關係は批判的になる。結局は同一人といえる。（二十）この点は、四迷

だけでなく、驕外にも違った形で出てくる。自分の内部生命を生かしているこうとすれば、他物と衝突する。そこで、太田は一番大事なもの捨てて、それで社会的には自分を生かしていく。(↓無意味な一生) 文三の場合は、現実といつも食い違つて遂に気が遠う。だが「舞姫」は、現実と適合し、自分を殺してしまふ。文三は現実の敗者でも自分は信用出来たが、太田は自分の心を自分で信じられなくなるという悲劇といえる。(二十一) 当時の文壇は、文芸革命家として自他共に許す道徳の所説ですら、根本の問題に少しも触れていない修辭論で、人生問題などは全く文学と没交渉と思われていた。(二十二) 二葉亭日記の原文引用。

参考文献

- 一、内田魯庵「おもひ出す人々」筑摩選書
- 二、桶谷秀昭「二葉亭四迷と明治日本」文芸春秋社
- 三、中村光夫「二葉亭四迷論」進路社
- 四、中村光夫「日本の近代小説」岩波新書
- 五、座談会「明治文学史」(柳田・勝本・猪野三氏編) 岩波書店
- 六、清水茂「浮雲論」岩波「文学」一九五四、十月号

郷土作家
文芸講座主宰

研究室受贈圖書雑誌目録四

- 国文学論考(都留文科大学国語国文学会) 第28号
- 国文学論集(上智大学国文学会) 25
- 国文学論集(山梨大学教育学部) 第28集
- 国文学論叢(龍谷大学国文学会) 第三十七輯
- 国文学研究(熊本女子大学国談話会) 第三十七号
- 国文白百合(白百合女子大学国語国文学会) 23
- 国文談話会会報(熊本女子大学国談話会) 第27号
- 国文鶴見(鶴見大学日本文学会) 第二十六号
- 国文目白(日本女子大学国語国文学会) 第三十一号
- 国文論叢(神戸大学文学部国語国文学会) 第19号
- 古代研究(早稲田古代研究会) 第24号
- 古典論叢(古典論叢会) 第23号
- 語文(大阪大学国語国文学会) 第五十八輯、第五十九輯
- 語文(日本大学国文学会) 第八十二輯、第八十三輯、第八十四輯
- 語文研究(九州大学国語国文学会) 第七十三号
- 語文と文学(群馬大学語文学会) 第二十八号
- 駒澤國文(駒沢大学国文学研究会) 第29号
- 相模國文(相模女子大学国文研究会) 第19号
- 滋賀大國文(滋賀大学国文学会) 第三十号
- 静大國文(静岡大学日文学部国語談話会) 第36号